

# 第79回北摂小児科医会プログラム

日時：平成27年12月12日（土）午後3時

場所：西宮市立中央病院 3階講堂

〒663-8014 兵庫県西宮市林田町8-24

TEL：0798-64-1515(代表)

共催

北摂小児科医会

ノボ ノルディスク ファーマ(株)

日本イーライリリー(株)

Meiji Seika ファルマ(株)

## 第79回北摂小児科医会 プログラム

### ◇話題提供(15:00～15:10)

「成長ホルモン製剤(ノルディトロピン フレックスプロ注) 関連情報」

ノボノルディスクファーマ株式会社

### ◇一般演題(15:10～16:10)

前半の部 座長 先生 (西宮市立中央病院小児科)

#### 1. 『咽後膿瘍の3例』

大阪府済生会吹田病院小児科

○勝間勇介、山本浩継、中村千華、平野翔堂、橋本泰佑、松田百代、奥廣有喜、後藤実加、加藤豊、宮下恵実子、川上展弘、吉川真紀子、徳永康行、茶山公祐

咽後膿瘍の3症例を経験した。いずれの症例も発熱と頸部腫脹をみとめており、うち2例では頸部の運動制限もみとめた。3例とも第2～4病日に造影CTで診断し抗菌薬静注により治療を行い、外科的排膿を必要とすることなく治癒した。

年少児が発熱に伴い頸部の腫脹と運動制限をみとめた場合には咽後膿瘍を疑い早期に画像診断を行う必要がある。また本疾患は早期に診断できれば、外科的に穿刺・排膿を行うことなく内科的な治療のみで治癒する可能性は十分にあると考えられた。

## 2. 『ドクターカー搬送が有効であった敗血症性ショックを伴う絞扼性イレウスの一例』

兵庫県立尼崎総合医療センター小児救急科

○山上雄司、菅健敬、高原賢守、河内晋平

当院は2015年7月1日より兵庫県立尼崎総合医療センターとして稼働を始め、小児3次医療までを担う急性期医療機関として、小児ドクターカー運用を開始している。まだ、運用開始間も無いが、徐々に出勤件数は増加傾向にある。そうした中で、今回我々はドクターカーによる搬送が良好な予後につながったと思われる4歳男児の敗血症性ショックを伴う閉塞性イレウスの一例を経験したので報告する。

## 3. 『顔面蒼白で救急外来を受診した生後7ヶ月の早期産児』

兵庫県立尼崎総合医療センター 小児循環器内科 1)、心臓血管外科 2)

○稲熊洸太郎<sup>1)</sup>、坂崎尚徳<sup>1)</sup>、松岡道生<sup>1)</sup>、石原温子<sup>1)</sup>、鷄内伸二<sup>1)</sup>、村山友梨<sup>2)</sup>、川崎有亮<sup>2)</sup>、植野剛<sup>2)</sup>、吉澤康祐<sup>2)</sup>、岡田達治<sup>2)</sup>、大野暢久<sup>2)</sup>、藤原慶一<sup>2)</sup>

月齢7の男児。数日前から感冒症状、間欠的な発熱が持続しており、当日突然の顔面蒼白を主訴に緊急搬送された。受診時は敗血症性ショックを疑われたが、その後に心雑音を聴取、心エコーで著明な僧帽弁逆流を認めた。乳児特発性僧帽弁腱索断裂による急性心不全と診断、同日緊急手術を行い、合併症なく症状改善した。本疾患は早期診断・治療が必要であるため、救急外来での乳幼児の呼吸循環不全では、本疾患を念頭に置くべきである。



----- コーヒータイム -----  
(16:10~16:25)



◇総会 (16:25~16:35)

◇一般演題(16:35~17:35)

後半の部 座長 門谷真二 (西宮市立中央病院小児科)

## 4. 『右腕の痛みを主訴に来院した川崎病症例』

兵庫県立西宮病院小児科

○小柳津裕子、安部治郎、小泉眞琴、岡田陽子、宮原由起

川崎病は臨床症状により確定診断に至るが不全型症例が15~20%前後存在し診断に苦慮する症例を経験することも比較的多い。また川崎病には種々の合併症の存在が知られており発症初期の症状によっては診断が

かない症例も存在する。今回我々は右腕の痛みを主訴に受診し最終的に川崎病と診断された4歳女児例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

## 5. 『ガンマグロブリン、ステロイドパルス療法、シクロスポリンに不応であった川崎病の2例』

1) 箕面市立病院小児科

2) 兵庫県立尼崎総合医療センター 小児救急集中治療科

○溝口 好美<sup>1)</sup>、奥山 直美<sup>1)</sup>、橋本 和久<sup>1)</sup>、桂 聡哉<sup>1)</sup>、山本 恭子<sup>1)</sup>、東 純史<sup>1)</sup>、  
木島 衣理<sup>1)</sup>、金野 浩<sup>1)</sup>、下辻 常介<sup>1)</sup>、山本 威久<sup>1)</sup>、高原 賢守<sup>2)</sup>

症例1は4歳男児、症例2は10ヵ月女児で、いずれも大阪スコアのハイスコアに相当。ともに静注免疫グロブリン療法(IVIG)、ステロイドパルス療法(2回)を用いた初期治療を行うが反応せず、IVIG追加およびシクロスポリン(CyA)療法でも解熱しないため転院した。ともに転院先で血漿交換療法を施行し解熱した。冠動脈の最大径は前者+3.0SD、後者+4.6SDであった。追加治療不応の川崎病について文献学的考察を加えて発表する。

## 6. 『γグロブリン投与に併用するステロイドパルス2回治療のハイリスク川崎病に対する効果』

箕面市立病院小児科

○桂聡哉、橋本和久、奥山直美、山本恭子、東純史、木島衣理、金野浩、溝口好美、下辻常介、山本威久  
大阪川崎病治療研究会

ハイリスク川崎病の初期治療でγglbと併用するmPSLパルス治療回数について検討した。ハイリスク群は大阪スコアで判定し、パルス1回をA群、2回をB群とした。A、B群の人数は各々67、107名で、解熱効果、再燃・再発の有無については有意差を認めなかった。冠動脈拡大の頻度はB群で有意に減少した。ハイリスク群に対するmPSLパルス2回併用治療は1回併用治療よりも、有用な治療法である可能性が示唆された。

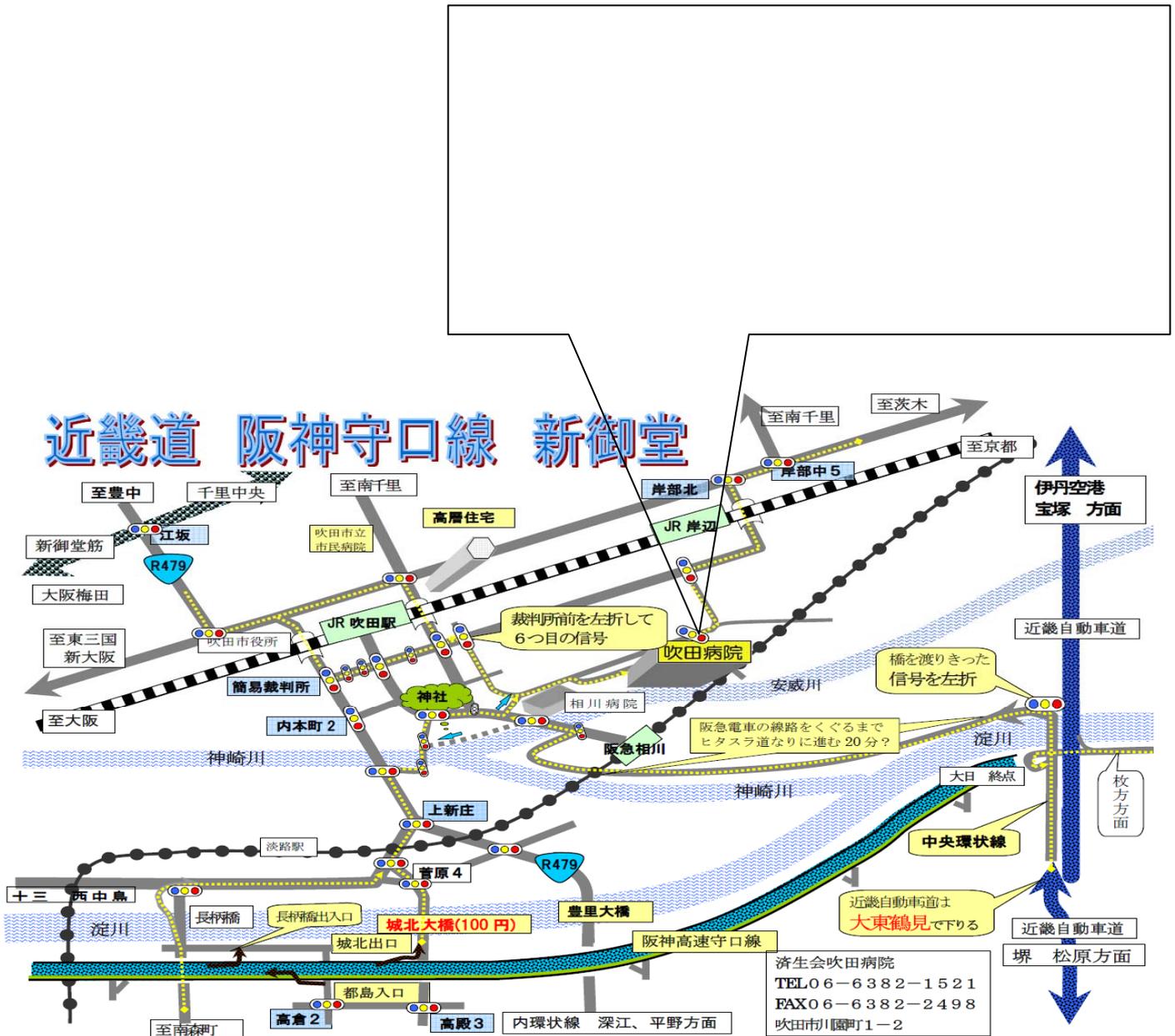
## 7. 『SHOX欠損症であったが、外因性ステロイド投与が低身長に関与したと思われるアトピー性皮膚炎の1女児例』

四天王寺和らぎ苑<sup>1)</sup>、西宮市立中央病院小児科<sup>2)</sup>

○中島良一<sup>1)、2)</sup>、寺前雅大<sup>2)</sup>、柏原米男<sup>2)</sup>、匹田 典克<sup>2)</sup>、門谷眞二<sup>2)</sup>

6ヵ月時よりアトピー・食物アレルギーで除去食・ステロイド外用療法中の女児が低身長にて受診。発育曲線で外用ステロイド療法が強化された2年半前より身長増加の悪化あり、検査でステロイド過剰による部分的副腎抑制が示唆された。ステロイド軟膏中止後成長障害消失したが低身長持続、上肢短縮傾向あり全身骨撮影でMadelung変形あり。SHOX遺伝子ヘテロ欠損をFISHで確認。日常診療では身長・体重測定は重要です。

# 会場までの案内地図



## 公共交通機関をご利用の方

阪急神戸線西宮北口から下車徒歩約8分  
JR 東海道線吹田駅下車徒歩約20分

## お車をご利用の方

駐車場は無料でご利用頂けます